

## 第3回 SPARC Japan セミナー2020

「初めての研究データ」

# パネルディスカッション



朝岡 誠	(国立情報学研究所)
林 賢紀	(国際農林水産業研究センター)
加藤 斉史	(国立研究開発法人科学技術振興機構)
込山 悠介	(国立情報学研究所)
神谷 信武	(チューリッヒ大学)
三上 絢子	(北海道大学附属図書館)
安原 通代	(国立情報学研究所)

### アンケート

●朝岡 ディスカッションの前に、Slido のライブ投票機能を利用した簡単なアンケートを行います。質問は二つあります。

一つ目は、加藤様から紹介があった J-STAGE Data を利用したいかどうかという質問です。研究者の皆さまは、自分あるいは自分のプロジェクトで使ってみたいかどうか、図書館員や URA、学術出版関係の皆さまは、自分の業務に関係する研究者に薦めたいかどうか、「ぜひ利用したい」「利用したいが課題がある」「他のリポジトリを使いたい」「そもそも Web を介したこのようなサービスを利用して研究データの管理または公開を行いたくない」という4択でお答えください。特に「利用したいが課題がある」という方は、Q&A でその課題または要望について書いていただくと幸いです。

二つ目は、込山様から紹介があった GakuNin RDM の利用についての質問です。ご回答をお願いします。

—アンケート入力—

それでは、回答を締め切らせていただきます。ご回答いただきありがとうございました。

皆さまの回答結果を林さんから報告していただきます。

●林 まず、加藤様の講演で紹介していただいた J-STAGE Data については、「ぜひ利用したい」「利用したいが課題がある」が多かったです。課題としては、今までご説明いただいたような中身だけなのか、あるいはもう少し何か情報があるのか、また、論文がリジェクトされたときにデータはどうなるのかなどが挙げられていますが、このあたりはこの後のディスカッションで広げてゆきたいと思います。

●朝岡 ありがとうございました。加藤様、この結果についてコメントを頂けますでしょうか。

●加藤 今年度から本格運用に移りたいと思っていますので、「利用したい」とご回答いただいた方、ありがとうございます。ぜひ問い合わせを頂ければと思います。一番多かったのが「課題がある」ということで、本格運用には入れると思っているのですが、まだ課題

解決に至らないところは、またお伺いしながら改めていきたいと思います。本日伺えれば伺いますし、後日でもお問い合わせいただければと思います。

●朝岡 ありがとうございます。

次に、GakuNin RDM についての回答結果を林さんから紹介していただけますか。

●林 こちらも「利用したい」「利用したいが課題がある」が合計 87%で、ほぼ皆さん使ってみたいということですが、「課題がある」が半分くらいで、「他のサービスを使いたい」も若干あります。ただ、質問でもそれほど大きな課題はなかったような気がしますが、そのあたりはどうでしょうか。

●朝岡 そうですね。GakuNin RDM 自体に何か課題があるというより、もしかしたら自分たちの機関内でポリシー的な意味で課題があるということかもしれません。込山様、今のこの結果についてコメントをお願いできますでしょうか。

●込山 GakuNin RDM はサービス開始直後なので、これだけ「利用したい」という声を頂けたのは非常にありがたいと思っています。同時に、課題がたくさん残っているということで、もう少し機関の皆さまの声を聞きながら、開発に反映できることは反映し、本日のお話にあったような共通のフレームワークや何らかのルーブリックに落とし込んでいけるのであれば、それに合わせたシステムの改修を進めていくことで共通化を図っていきたいと考えます。

●朝岡 ありがとうございます。

## 本日の講演内容の振り返りとディスカッション

●朝岡 それでは、パネリストの皆さまの報告を振り

返りながら、本パネルディスカッションの論点について説明します。

本日の講演では、研究データ管理と研究データ公開のためのインフラとその実例、そして研究データ管理・公開のグッドプラクティスを構築していく取り組みについて講演していただきました。研究データ管理のインフラについては込山様に、エディンバラ大学の事例とグッドプラクティスを構築していく取り組みについては神谷様に、研究データ公開、とりわけ論文の根拠データ公開のインフラについては加藤様に、北海道大学の事例については三上様に、グッドプラクティスを構築していく取り組みについては安原様に紹介していただきました。

研究データの管理も公開も、神谷様や三上様が説明されたように、手を付けられるところ、要望があったところから始めていくことが重要です。自分たちに何ができるかというのは、神谷様が紹介された Evaluate your RDM Offering や、安原様が紹介された COAR コミュニティフレームワークの下で、サービスの長期的目標を立てて展開していくものであるということ、本日の講演を聞いて実感しました。取りあえず手の届くところから始めてみよう、そして他の人の取り組みをまねしてみよう、それで長期計画を立てていこうということです。

その取り組みを行っていく中で、込山様が紹介された GakuNin RDM や、加藤様が紹介された J-STAGE Data や、今の機関リポジトリが活用されることになると思います。今回、「初めての研究データ」というタイトルを見て、すぐにでも研究データ管理・公開を始めたい聴衆の皆さまからすると、自分の組織はどうやって始めていけばいいのか、誰がイニシアティブを取っていけばいいのか、研究者側なのか、それとも機関側なのかということについて疑問を持たれたのではないかと思います。GakuNin RDM も J-STAGE Data も、どちらも研究者や学会がイニシアティブを取って活用するインフラではありますが、実際、北海道大学やエディンバラ大学の事例を見ると、研究教育機関がデー

タポリシーにのってイニシアティブを取って行っており、研究者と、研究教育機関のスタッフである図書館員の皆さま、URA の皆さま、場合によってはインフラの関係者の皆さまとの関係性が重要だと感じました。

また、今回、海外におけるグッドプラクティスに向けた取り組みが紹介されましたが、海外の Evaluate your RDM Offering や COAR コミュニティフレームワークでは少し敷居が高いのではないかと、日本版のこういったものができるのかどうか、また、できた場合、自分たちも実践として使えるのかどうかについて疑問を持たれたのではないかと思います。

そこで、本日は次の三つの論点を中心にディスカッションを進めていき、その中で皆さまから Slido で頂いている質問に回答していきたいと思えます。

第1の論点として、研究データ管理における機関と研究者の関係についてディスカッションしていきます。データ管理の話題ということで、まずは神谷様から、エディンバラ大学等、海外の機関では機関と研究者はどのような関係になっているのかコメントを頂けますでしょうか。また、エディンバラ大学の事例を紹介していただいた中で、RDM のロードマップが刻々と変化したと聞きましたが、機関と研究者の関係性はロードマップの進行とともに変化が見られたのかどうかについて、お聞かせいただけますか。

●**神谷** 私はエディンバラ大学で働いているわけではないので、確実な情報は出しづらいのですが、発表でエディンバラ大学の該当ページを紹介したように、研究データ管理サービスのところは、研究者に対して研究データ管理のやり方などのサポートをしていますし、研究データを取り扱うツールに関しても扱いやすいように改善しています。そういうところを含めて、機関がサポートしているところは確実にあるはずで。

ロードマップによって研究データに関するサービス内容が変化しているので、もちろん研究者と機関の役割が変わってきています。また、研究データ管理を、

ある機関の中でインフラとして定着させるときに、研究者からの理解とコミットメントが確実に必要になります。ロードマップを一緒に作成しながら、研究者がこれまで研究データ管理のサービスを受けてきたけれども、これから改善したいのはここですよねという話は確実にしていく必要があると思えます。ですので、役割分担は、そのコミットメントの具合やステージによって変わってくるのではないのでしょうか。

●**朝岡** ありがとうございます。

次に込山様にお伺いします。GakuNin RDM の設計者として、機関と研究者の関係をどのようにお考えになって GakuNin RDM を設計したのでしょうか。実証実験を通じて、その中で分かったことも含めてコメントを頂けると幸いです。

●**込山** GakuNin RDM の設計の基軸という意味では、機関と研究者の軸、もう一つ、研究の推進と公正という軸があります。一見すると、機関はガバナンスの強化で研究データ管理を研究者にやらせたいというように捉えられてしまうのですが、決してそれだけではありません。機関ももちろん研究を推進しようとしていますし、研究者は研究者で、自分たちの研究の不正防止だけではなく、真面目に取り組んでいる研究者からすると、何か外から訴えられたりしたときの証明手段にもなるなど、幾つかの軸で切って考えていきました。

実際の設計の進め方としては、本日も幾つか紹介がありました。国内外の RDM サービスのフレームワークからシステムに関する項目やガイドラインを切り出して、分解してみ、機能要件を考えて、それを軸に、先ほど言った二つの観点から分類して、これは RDM の必須機能だろうというところから優先的に埋めていったというのが設計段階で行ったことです。

実証実験の段階になると、大学側からの要望なども出てくるので、それをいかに束ねるか。全ての要望に応えることはできませんが、より多くの大学から要望が出ている機能については取り組んでいこうとしまし

た。そこでは、研究者が望むことと組織が望むことの違いや、どの時期にどの機能を充実させていくかということに悩みました。国内の場合、当初はどうしても研究不正防止や研究データの10年保存の影響を受けてデータ管理をしたいという、どちらかというと機関の研究担当理事などに理解していただくための実装や説明を進めてきて、最近になってようやく研究者に近い機能を充実させはじめたという経緯があります。

●朝岡 ありがとうございます。

次に、データ公開の見地から、加藤様、三上様、安原様にお伺いしたいと思います。研究データ公開は研究データ管理に密接に関連していて、研究データ管理の時点で必要なメタデータ情報がないと、十分な形で研究データを公開することができません。研究データを公開する立場からすると、研究データ管理における機関と研究者の関係はどのようなものが望ましいと思われるでしょうか。まずは加藤様からコメントをお願いします。

●加藤 私たちからは、研究者の所属機関はあまりよく見えていないところがあります。所属機関に関しては、所属機関がデータに関するポリシーを決めていくと研究者が共有を進めやすくなるということぐらいしか見えていません。発行機関についても同様ですが、ポリシーにてデータ共有について定めるジャーナルが増えてきています。こういったことでポリシーが決まってくると、研究者にもデータ共有をするということが広まっていくので、世の中的にもデータ共有という考え方が浸透していくのではないかと考えています。

●朝岡 ありがとうございます。次に三上様、図書館員としての見地も含めてコメントを頂けると幸いです。

●三上 研究データ管理については、機関と研究者との間でメリットを共有できるのが望ましいと思っています。

ます。支援側で研究データ公開を推進しようと思っても、管理に必要なメタデータと公開に必要なメタデータは違うと思うのです。公開に必要なメタデータには研究者の余分な労力を使う以上、研究者側にメリットがないものを作ってほしいと言ってもあまりうまくいきません。ただ、研究者側でメリットを判断する上で、助成や出版社など研究データ公開が必要になっていく側面について、URA や図書館はいろいろと情報を持っています。そういった情報を幅広く持つ支援部署が研究者に向けたサポートや情報を出していった研究者をサポートする形がいいと思います。

あとは、機関側から研究データの公開をするための管理や公開の意思決定のための情報提供、支援の案内をして、研究者の方でメリットを感じてくれるような状態が望ましいと考えています。

●朝岡 ありがとうございます。

最後に安原様、2020年11月から12月に行われた「国内機関における研究データ管理の取り組み状況調査」の結果も踏まえてコメントを頂けると幸いです。

●安原 今回のアンケート調査を行って、研究データ管理における、サポートする側の関連部署の連携の重要性を改めて感じました。それとともに、研究データライフサイクルの中のどの段階でどのような課題があるのか、研究者の方はそういう場合にどこに相談するかを分かりやすくすることで相互にメリットを感じていただけるのではないかと思います。

●朝岡 ありがとうございます。

●林 Slido に頂いている質問にもありましたが、研究データを公開していかないといけないという話が出てきたとき、機関の中で図書館員ができることは何かというと、例えば「メタデータを付けることは得意です。目録ですつとやってきた業務だし、できます。しかし、研究の中身はさっぱり分かりません」となりま

す。しかし、いろいろな政策文書などを見ていると、図書館職員がうまくコミットしてサポートしていきとされています。今までは論文とそのメタデータを扱うことで学術情報の流通を担ってきたわけですが、それが研究データにもどんどん幅が広がってきていて、だから私たちはこういったセミナーを開催するし、サポートもするというので、先ほど三上さんから、大学という現場でいろいろな取り組みをされている事例をご紹介いただきました。

では、そもそも図書館や図書館職員というのは、こういう研究データを出す、公開する、管理するという課題を持っている機関や研究者にとって相談しやすい人たちなのでしょうか。相談したいのだけれども、何か忙しそうだし、最近では電子ジャーナルもあるから電子もいけそうだけれども、紙しか分かっていないのではないかと思われていたら嫌だなと思ったりするので、もちろん図書館職員はサービスをするのが仕事ですから、いろいろなところに出ていって、こんなこともできます、あんなこともできます、サポートをやりますよと言って歩くのが大好きで、私も好きです。しかし、研究者から見たときに、相談しやすい、話を持っていきやすい存在なのか。神谷様や三上様、何かご経験や知見があれば教えてください。

●神谷 もちろんそれは各図書館員が置かれている状況によって違うと思うので、私からの視点が正しいかという点は何とも言いがたいのですが、私は日本学の図書館で働いていて、先生方とは、コロナ禍ではない状況だと会う機会が結構頻繁にあり、インフォメーションリテラシーなどの授業も入門コースの中で受け持たせてもらっているという経緯があります。ですので、話しかけやすい方なのではないかとは思いますが。ただ、他のところでもそうなのかという点、それは少しまた別の話なので、やはり各図書館の置かれている状況を見ながらということではないでしょうか。

●林 なるほど。確かに「いや、うちの図書館は何か

話しにくいんだよね」みたいな状態だと、それで全体として回るのかというのはちょっと分かりませんね。

●神谷 私がなぜ研究データ管理を大事だと思っているかという点、私はもちろん公開された研究データを使いたいと思っていますし、それをオープンサイエンスとして再度利用するのに役立てていきたいと思っていますからです。そういう意図があるときに、私が研究者に対して、「図書館でもそういうサービスを行おうと思っています」という話を振っていきやすい状況をつくってあげたいと思っています。それは図書館員が思いつく限り、起こりません。やはり誰かがイニシアティブを取って話し掛けない限り、何も起こらないのではないのでしょうか。

●林 確かにそうですね。

●三上 それでいえば、今回の公開事例の中には、HUSCAP は論文を公開する場所だと初めから知っていて研究データを公開したいという先生がいらした記憶があります。HUSCAP は定期的に北海道大学で論文を出した研究者の方に「登録しませんか」とお誘いのメールを送ったり、私の上の世代の話なのであまり詳しくはないのですが、立ち上げのときに少し営業で回ったりしたという経緯があって、一応、機関リポジトリという論文を公開できる場所があるという認知があったのが相談につながったのかなと思っています。

もう一つ、GakuNin RDM を図書館で宣伝していると、最初に GakuNin RDM で研究データを公開できるかという問い合わせが来て、GakuNin RDM ではできないけれども、Figshare や HUSCAP のようなリポジトリであれば可能ですとご紹介することがあります。そのように、何かしら研究データや公開が図書館と結び付くヒントがあれば、あるいは、という気はします。

●林 確かに北海道大学の HUSCAP は、割と機関リ

ポジトリのはしりのところからずっと運用されているというイメージがあります。それだけの蓄積と認識があるからこそ、そこに行けば自分たちのものを出してもらえる、情報が分かるだけではなくて発信もできるというイメージの切り替え、あるいは新しい機能のイメージを付けることがうまくいったのかなと、話を聞いていて思いました。

●朝岡 おっしゃるように、研究者と機関のどちらがするかというよりは、まずは研究データの管理にしろ公開にしろ、やらなければいけないということよりも、管理や公開をすることで自分の意見が発信できるのだというように、ポジティブな研究者なり図書館員をうまく具合に結び付ける環境自体が必要だと思いました。

それでは、次の論点に移りたいと思います。第2の論点は、研究データ、特に論文の根拠データの公開についてです。加藤様が発表されたように、海外のジャーナルに投稿する場合、根拠データの公開が義務付けられていることもあり、研究者からのニーズが高まっていますが、リポジトリ側はその際にどこまでサポートすべきか、または GakuNin RDM などの RDM で管理した研究データを公開するに当たってどのような点に連結していくのか、特に研究データ管理と研究データ公開はそれこそ連結しているものなので、その連結についてどのように考えていくべきなのかということを議論したいと思います。

まずは研究データ公開ということで、加藤様と三上様にお伺いします。J-STAGE Data では投稿後の論文の根拠データを対象に、論文著者、研究者側が根拠データをメタデータも含めてアップロードするという研究者ファーストのスタイルを取っていて、ジャーナル発行機関は公開にあまりタッチしません。一方で北海道大学では、機関に所属する研究者の要請に応じて図書館員がメタデータを準備して、根拠データをアップロードする、そして投稿前の論文の根拠データの公開に当たっては査読者との限定的な共有対応なども行っています。ジャーナルと機関では幾らか違いがあるか

もしれませんが、研究者とそれをサポートする機関の関係は、研究データの公開においてはどうあるべきだと思いますでしょうか。研究者が上げたいデータを自分で上げていくというセルフアーカイブみたいなやり方もあると思いますが、機関リポジトリの方で幾らか研究者をサポートし、機関として研究データを公開するパターンもあると思います。あとは、根拠データの公開において必ずしておかないといけないこと、例えばライセンスの確認や必須メタデータの確認なども含めてコメントを頂けると幸いです。まずは加藤様、J-STAGE Data での査読前の論文の取り扱いに対する展望も含めてコメントを頂けると幸いです。

●加藤 少し緊張して発表でうまく伝わらなかったのですが、まず、J-STAGE Data はジャーナル発行機関のためのサイトですので、ジャーナル発行機関がタッチしないということではなくて、ジャーナル発行機関に投稿されるものが最終的には発行機関の判断で公開に結び付くという流れになっています。その前に、ジャーナル発行機関の中で J-STAGE Data と別に投稿を受け付けて、審査の上で OK であったものを J-STAGE Data に登載します。また、著者が直接 J-STAGE Data に登載していくことも可能です。それをジャーナル発行機関が確認した上で公開するかどうかというルートの違いがございしますが、基本的にはジャーナル発行機関が確認して公開に結び付きます。

査読前の原稿の根拠データについても、先ほどの流れのように公開前に載せることができますけれども、同じようにジャーナル側で判断して公開することになりますので、ジャーナル側のポリシーによりませんが、査読前に公開してよいというポリシーを取らなければ公開されないということになります。

そういう意味ではジャーナルと結び付いた形になっていますので、投稿先がまだ決まらない、査読前の原稿の段階で根拠データを載せる先としては J-STAGE Data はふさわしくないという状況になっています。

併せて、先ほど説明の中でリジェクトのご質問を頂

いたときの回答で間違っただ話をしてしまいましたので訂正します。リジェクトの場合、発行機関の中で査読審査をしている中でリジェクトになっていますので、データ自体、まだ公開されていません。また、メタデータも公開されていない状態ですので、その状況の中で削除するかどうかは発行機関が決めることができます。

●朝岡 ありがとうございます。関連して、J-STAGE Data について、パイロット運用参加中の学会の方から質問が来ていますので紹介します。「学会として、ジャーナル側ではなくて投稿者に、論文の受理後のデータのアップロードの公開などのオプションを付けたいと考えている機関があります。そのようなことを、あくまで学会として投稿者に提供するサービスの一つとして位置付けることについて、J-STAGE としてはいかがお考えでしょうか」ということですが、いかがですか。

●加藤 論文にひも付かなくてもデータを載せたいということですね。J-STAGE Data のポリシーとして、J-STAGE 掲載の論文と関連するデータとなっていますので、関連度にもよると思いますが、ひも付ける論文がない場合には対象外となります。

●朝岡 上げられるデータはかなり限られている感じですね。

●加藤 そのとおりです。論文とひも付いているということになりますので、その論文を書くに当たって研究の中で発生したデータなどは関連度が多少低くても上げることができますが、全く論文にひも付かないままデータを置く場所としては使えません。

●朝岡 ありがとうございます。

次に三上様へ、「学内で研究データの取り扱いについて検討したり、実装したりする組織が他に存在する

のか」という質問を頂いています。例えば研究支援担当の中で情報システム担当、研究者と図書館だけではなく、他に組織で連携しているかどうかについてコメントを頂けると幸いです。

●三上 GakuNin RDM の導入のときには情報基盤センターと連携して機関のストレージを入れたりしています。ただ、公開については今のところ他部署とはあまり連携していません。一応、URA が割と科研費などの申請の面倒を見ているので、国内で研究データの公開が助成に必須の場合が多くなると、そことの連携の芽はあるのではないかと個人的には思いますが、現時点では特段、どこと連携しているということはありません。

●朝岡 ありがとうございます。次に安原様にお伺いします。JPCOAR では、根拠データの公開においてリポジトリを運用する機関はどのような役割を担うべきだと議論されているのでしょうか。

●安原 正直なところ、JPCOAR 側ではそういった議論はあまり深まっていないというのが実状です。少し話がずれるのですが、私個人としては、以前、ドイツのハノーファー大学でインタビューした際に、ハノーファー大学では研究者の意見を取り入れて、ドイツ語で利用でき、ドイツ国内で保存される安全で信頼できる研究データの公開場所として、研究データのためだけの機関リポジトリが作られたという話を聞きました。リポジトリを運用する機関としては、そういう安全で信頼できる研究データの公開場所の提供という役割を担うものは重要だと感じました。

●朝岡 ありがとうございます。

次は、データ管理の見地から神谷様と込山様にお伺いします。研究データ管理は、先ほど言ったとおりに研究データ公開に密接に関連していて、幾らか研究データ管理と公開の中で連携が必要だと思います。まず

は神谷様、海外の事情を踏まえて、管理と公開の関係についてコメントを頂けると幸いです。

●**神谷** 先ほどからずっと話が上がっているように、公開するときにはメタデータをきちんと付けて、FAIR 原則にのっとるなどして、みんなで後で使えるようにしようというコンセンサスがあり、管理は、もちろんプロジェクトが走っている間はその研究者なり、研究者をサポートする人なりが行うことになると思います。公開のときにメタデータを付けて公開したデータを長期間公開できるようにリポジトリに上げておくところの連携をどうするかは、図書館なり他の機関なりが考えるべきことだと思っています。日本の場合だと GakuNin RDM を使って管理した後で、ではどうするのかというところが大変気になるのですが、その辺はどうなのですか。

●**込山** NII の三つの基盤は発表の中でも紹介させていただきましたが、管理の基盤と公開の基盤は安全のために完全に切り分けています。もちろん公開の基盤、機関リポジトリで JAIRO Cloud には大勢の機関がいらっしやいますので、まずは WEKO3 を目標に GakuNin RDM からデータを送出できる仕組みを開発していく予定です。その際、国際的に使われている標準的なリポジトリの通信プロトコルを使い、国内外のリポジトリで使われているメタデータスキームに沿って、きちんとデータを送り出せるように設計しておけば、それ以外のリポジトリ等とも連携していけるのではないかと思います。

●**朝岡** ありがとうございます。私も NII で公開の基盤をサポートしている立場からすると、管理と公開の関係は連携していかなければいけないものだと思います。特に今、私は機関リポジトリの開発に携わっていて、制限共有や、メタデータでもいろいろなタイプのを自分でエディットできるような形で作成しているので、こちらも皆さまに使っていただけると幸い

です。

最後の論点に移ります。日本版 Evaluate your RDM Offering や、日本版 COAR コミュニティフレームワークが実現できるかどうかについてディスカッションしたいと思います。研究データ管理をする機関にとって、自分のサービスの長期的目標を立てていく上で重要になると思いますが、パネリストの皆さまはどのようにお考えでしょうか。まずは管理の方の日本版 Evaluate your RDM Offering の実現可能性について、まずは神谷様、お願いいたします。

●**神谷** 日本の方々の需要があればもちろんできますけれども、需要がなければ要らないのではないのかと思います。その辺は本当に皆さんと一緒に話し合っ決めていくべきことではないでしょうか。

●**朝岡** 海外では需要がやはりそれだけ高くて、管理する大学機関などがきちんと使うことが浸透しているという感じなのでしょう。

●**神谷** これは私の主観的な印象ですが、みんな手探りで分からない状況なのだと思います。その中でも、エディンバラ大学など特に盛んなところが例を出していて、それを見て参考にしているところもあったりします。ヨーロッパの中で、例えばいろいろなフレームワークが共有されていて、ある程度共有されているベースがあるから、ではうちもこういう感じにしていこうというような、共有感覚のようなものがあるのではないのでしょうか。こういうところから、ある程度経験や価値観を共有していくようなものが欲しいという感覚が生まれているような気はします。

●**朝岡** 確かにそうですね。まずはやる気がある機関などで、お互いに高め合うというよりも、お互いにそのように目標を持っていこうとすることでそのようなものができていると思います。共通するフレームワークという意味であれば、GakuNin RDM は使う機関が



幾らかあるので、そういった共有はしやすいと思うのですが、込山様、この辺についてどのように思いますか。

●**込山** GakuNin RDM が適用できるのはどうしても IT インフラなどの項目になってくると思いますので、そこは一つ埋まるとして、その周りをいかに埋めていくか。他の項目等も埋めていかなければいけないので、そういった意味で実際に動作している RDM サービスとして使いながら、組織の中での RDM サービスのあり方を検討していただくことはできるのではないかと思います。それを題材にして、牽引力のある学術機関、あるいはワーキンググループやタスクフォースの中でリーダーシップを発揮していただく機関やキーパーソンがいた方が、日本の場合はうまく、機関への RDM サービスの導入が進んでいくのかなと考えていました。

完成した万能な RDM サービスのモデルとなるユースケースが一機関から出てくることは、恐らくないのだろうとは思っています。それぞれの機関で最適な RDM サービスのベストプラクティスが生まれてくるのだと考えます。

●**朝岡** ありがとうございます。

次に、三上様と加藤様に、日本版の COAR コミュニティフレームワークの実現可能性についてお伺いします。研究データの管理・公開を行っている図書館員の立場から意見を頂けると幸いです。

●**三上** 大本の COAR フレームワークを眺めた個人的な感想ですが、結構、機関リポジトリの使っているシステムに依存するところが多いと思いました。恐らく日本の大学は JAIRO Cloud みたいに図書館内で管理していない場合もあるので、システムと人員を分けて考えるのはありかなと思いました。

インフラの JAIRO Cloud は恐らく共通のフレームワークだと思うので、判断基準や、大学が違ってもシステムが同じであれば、とここに注目して確認すればい

いというベストプラクティス的なものを共有できるかもしれません。一方で人員の話については、なかなか機関内での組織体制や相談窓口を明らかにするのは難しいかもしれません。ただ、国内で機関リポジトリを持っている大学が結構あります。北海道大学も機関リポジトリの論文の業務から伸ばす形でいろいろと実践していったので、国内は、今あるものから伸ばしていく形で考えるのが向いているのではないかと、個人的な感想ですが思いました。

●**加藤** われわれだけでベストプラクティスを探って広げるのには限界がございます。重要なことではあるけれども十分にはできていないところですので、日本版 COAR コミュニティフレームワークに期待し、関わっていただけたらと思っています。

●**朝岡** ありがとうございます。最後に、COAR コミュニティフレームワークを紹介していただいた安原様、JPCOAR では COAR コミュニティフレームワークをこれからどのように広げていくのか、国内機関とどのように関わっていくのかということについてコメントを頂けると幸いです。

●**安原** 先ほども申し上げましたけれども、まだ検討段階ではありますが、チェックリストを作成しているという意見は JPCOAR 内でも出ています。この COAR コミュニティフレームワーク自体も、今後毎年グッドプラクティスを採用してどんどん更新していく予定になっています。ですので、JPCOAR でチェックリストを作ったとしたら、それが完成形というよりも、実際に皆さまに使っていただいて、さらにより良いものにしていく必要があると考えています。また、先ほど紹介した国内機関の取り組み状況調査についてのアンケートで「研究データ管理の取り組みを行っている」と回答した機関に、可能であれば取り組み状況をより詳しく伺って共有させていただくことも考えています。そういう形で、実際に行っているグッドプラクティス

を共有していける形にしていきたいと考えています。

●朝岡 ありがとうございます。

林さん、皆さまの意見を聞いて、いかがですか。

●林 まさにこの SPARC Japan セミナーが、グッドな、またバッドなプラクティスを共有する場だと思いますので、ぜひ今回ご紹介いただいたコミュニティフレームワーク等々を実際に回してみて、そのご感想などを発表していただけたらうれしいです。

●朝岡 ありがとうございます。

今回、聞いてみて思ったのは、やはりまずは意欲のある人が始めてみるということです。始める中で、機関を超えて、ステークホルダーを超えて、団結してお互いの価値観を合わせられるようなフレームワークなどがつくれると、公開や管理が進んでいくのではないかと思います。

これでパネルディスカッションを終了します。どうもありがとうございました。